
未定

今 ひよこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未定

〔二二一〕

N 5353S

【作者名】

今
ひよこ

【あらすじ】

プロローグ（前書き）

文章が安定しないです。
すいません。

プロローグ

聖テイアテイナ歴 997年

王城エルグラム。

ここは、その一室。離れにある約30畳ほどの部屋の床には、凝つて作つてある赤い絨毯。高い天井には大きくよくわからない照明器具がぶら下がつていた。

そして部屋の中央にこれも人が悠々と川の字に5人ほど眠れるんじゃ、というデカいベットの上に一人の少女が腰まで伸ばした綺麗なブロンドの髪を振り乱し、布団をはねのけ寒そうに丸まつて寝ていた。

「ンンンン」と3回ドアがノックされる。

「お嬢様！朝です！ 起きてください！」

しつかりとした男の声が響く。

「うーん。あと、…何分にしようか？うーん。サナギが蝶になるまで…グ～」

ドアの向いの40代ぐらいの執事服を着た男は、そこまで考えることができるなら起きるーということを必死に心に押しどめる。

「今日は、”あの”騎士殿が見えられてるのになあ、残念だな」とゆつよつそこまで考えているのなら起き「何よー！それをさつさといなさいよーー」…「…て下さい」

執事の男が言葉を言い切る前に部屋の中がドタバタと騒ぎ出す。内心を隠しきれなかつた執事はいつものことかと呴きながらドアの前で背筋を伸ばして待つ。そして、部屋の騒音が消え、扉の前から大きいものを引きずる音がズズズと聞こえる。執事は、やつとかと待ちかまえ少女にかける言葉を用意する。

そしてバンッと音を立てて扉が開け放たれる。

「ねえ！アル「おはよーひやこます。お嬢様」… るの？」

ああもうーと言いたげな顔をしながら少女は。

「はーはー。おはよーひやこます。それでビ」に来てこひつしゃるの？」

「」の執事はきちんと挨拶を返さないと何の質問にも返さないし、利く耳持たずになつてしまつ。なのでいつも少女が折れてしづしづ挨拶を返すのだ。毎朝のことである。

「挨拶は、きちんとして下さい。と言つていますのに教育係兼執事の私の身にもなつていただけませんか？何が「おはようおはよう！」ですか。ハアー それとですねいつも言つてこいると思いますが、ドアの前に家具でバリケードを作らないでください。あと言葉づかいももつと丁寧にして下さい。そしておちつ「わかりましたわかりました。直せばいいんでしょ！それとこの家具は、トルドがー」……わかつていただければいいですが……」

朝つぱらから騒がしい一人である。

「それはともかく湯でも浴びて綺麗にしてきて下さい。それと、騎

士殿には応接間で待つていただいておりますので衣装もきちんとしてきてくださいね」

トルドは静かに言い聞かせるように言った。

それを聞いた白いネグリジェ（下着は透けてない）を着た少女は、わかったーと風呂場に走つて行つた。見ていた執事は、廊下を走らないでくださいといつもいつつているのだと、ため息を吐きながら密の人もとに足を進めた。

風呂に入り身だしなみを整えた少女は、応接間のドアの前にいた。そして自分の格好を見直す。

まずドレスは、ある程度身体の起伏がわかる落ち着いたライトブルー。胸元はそこまで開いておらず、首からかけた黒曜色の宝石が鈍く輝いてる。ドレスと同じ色のドレスグローブに顔にはうつすらと化粧をしてる。

少女は、悶々とちよつと地味すぎたかな?とかもつと大胆にいけばよかつたなどなどとブツブツ一人ごちていた。

「お嬢様?何をしていらっしゃるんですか?」

不意にドアが開きトルドが声をかけた。

ビクツとなりながら少女は、い、いま入るとこだつたのよと、中に入こえないようにどもつてゐる。

執事は、ハアそなんですかと棒読みで答えお待ちになつていら

つしゃるので早く入つてきて下さいねと、部屋の中に戻る。少女は、よし！と気合を入れコンコンと扉をノックする。中からどうぞと落ち着いた声が聞こえる。心臓がバクバクいうのがわかる。

それを、平常心平常心と言い聞かせる。そして彼女を普段から知っている人からすると誰これ？という落ち着いた声で。

「失礼致します。遅くなり申し訳ありません」

清楚系お嬢様風な感じで姿を見せた。

ところ変わつてお嬢の部屋。中には一人。もちろんお嬢様と執事である。

「誰よ！…さつきの…アルン様じゃないじゃない！…」

彼女は、自分の思い人？憧れているのは間違いないであろう人がいると思つていた。しかし、扉を開けてみれば自分よりも30は上であろうおっさんがないのだ。これでは、自分が、一人で舞い上がりバカみたいじゃない！あんなに頑張つて猫かぶつたのにと憤つていた。

「それは、お嬢様の早とちりでしょう。私は、ただあなたの”ナイト”になるかもしれない人が来ていますよ」といつたつもりだったんですが」

トルドは顎を撫でながら、やつ聞こえなかつたらすんませーんとでも言いたげであった。

白々しいこと思いながら、文句ばかり言つてもどうせ柳のようになられるだけだと、今までの経験で分かつてゐる。クソジジイと思ひながら口を開いた。

「で、結局あの人誰だったの?どこかで見たことある顔だったけど」

「あのお嬢様が追い出したかわいそうなお方は、隣国の宰相殿ですよ。息子の嫁に来てくれということでのよつな場を設けたのですか……あんな追い出され方をしたら……まあ破断でしょうけど」

「いつも言つてるけどねーわたしに縁談の話を持つてこないでつてゐでしょ。……姉やまにでも持つていきなさこよ」

「お嬢様。私、トルド＝ルイビアスはあなたのお父上にあなたが生まれした時から、誠心誠意お世話をすること仰せつかつております。それに、あなたのことを見つけております。それで、あなたの晴れ姿を見たいと思つてもいこではあつませんか」

「…………トルド…………」

「まあ、早く嫁に行つてもらえれば私の仕事がなくなり、少し早い悠々自適の老後が始まりますしね」

わざと休みテーといわんばかりであつた。

少し感動したわたしがバカだったと少女はうなだれるている。

「まあ今のは冗談ですが。あなたは王の娘なのですから遅かれ早かれ政略結婚などで他国に行くことになるでしょう。…つていつも言つてますけどドレスの下にズボン履かないでください」

「そんな夢のないこと言わないでよ。わたしだって町の娘のよう衝撃的な出会いして恋して恋愛結婚つてのに憧れてもいいでしょ。もしくは、わたしの王子様が迎えに来てくれるとか？……これは別にいいでしょーオシャレしなきやつてことないし。それに、このスカートのヒラヒラって苦手なのよ」

トルドは、お前お姫様だろー！王子様と結婚したいならできるわー！と心の中で突っ込んだ。

「……予想外に乙女なんですね」

「そりゃあ、わたしだって女の子だし…町の娘の話を聞いてると思うことがあるのよー」

「また、無断で城下に出やがりましたねお嬢様？」

ピクッと執事の眉毛が動く。少女は、あーーしまったと言わんばかりの表情。

いつもいつもこの教育係から危険ですから城の外には勝手に出ないでくださいと、口酸つぱく言われているのだ。まあ、それでも少女が城下に出ていたことは把握済みである。そういうときは陰から必ず護衛の騎士か侍女が常に見張つていている。これでもお姫様なので。本人はわかっていないみたいだが…。

「まだ罰がたりないようですね？」の間も同じ」とが言ったといつ
のに…今度は何の勉強を増やしましょつか」

それはそれは嬉しそうに「やつてこの少女を痛めつけようかと
執事は考えていた。すると焦つたように少女がわたわたと手足をバ
タつかせながら顔を青くしているのが見える。…まったくせわしな
いお姫様ですねと、その少女の様子を眺めていた。

考え込んでいた少女は、何か言い逃れる方法を思いついたのかボ
ンッと手をつぐ。

「そういえば、トルドってガラクタを集めていたわよね！？」

「…ガラクタって、私が集めているのは骨董品です」

「そんなのどうちだつて同じよ。それって昔のものでしょー…どう
して男は、年を取るとそんなものに興味を持つのかしら？ だんだ
ん死に近づいて行つてゐるのに？ 骨董品から昔の人の死を感じ取つて
準備でもしているのかしら？」

心底わからないといった表情で呟く。

「何の準備ですか？ 何の？」

「死ぬことに対する、じゃない？」

「じゃない？ ジャ、ないですよ、それでなんですか？ あからさまに
話をそらして…何をたくらんでるんですか？ ……罰は執行しますよ

すると少女はギクッと肩を動かしながら答える。

「えーっとね…実は城下で貰つたものなんだけビ、ちょっと見てほしいなーなんて……ははは」

そう言つて少女が机の中から出してきたものを受け取る。まじまじと見ながら賄賂ですかと、軽口をたたきながらふむつと顎に手をあて考える。

「（どうこうことだこれは？？護衛の報告では、特に皿を張る点はなかつたはず、ましてや何かを受け取つたとなると…）お嬢様これは誰から頂いたんですか？」

「よく覚えてないんだけど、いつの間にかポケットに入つてたみたいな？…それで、ど、どうかな？」

とこれで許してくれないかなーと、少女が嘆願してくれる。トルドは、一度軽く頭を振つてそのことにつけば、後から問い合わせそうと頭を切り替えてもう一度渡された物体を見る。

「（ふーむ…特に危険はないよつ見えるが、確かに私が集めていうな古いものはある……少し魔力らしきものは感じるが）」

この物体の材質は、宝石でできており手のひらサイズで平べつたい氣になるのは。

「（これに彫つてある幾何学模様だな…見たことないな、後で専門家に見てもうづつようにお願ひするか）」

トルドは結論付けて少女を見ると、まだかと険しい顔をしてトルドを見ていた。結構な時間考えていたらしい。

「これは、預かっておきますね。…何なのかよくわかりませんし、危険なものかもしれませんので」

じゃあここの、と少女は顔をパッと輝かせる。

「言つときますけど罰はなくなりませんよ…それに賄賂なんて言語道断ですーあなたは王女なのですからそいついたものに染まつてはいけませんー罰上乗せです」

「なんですよーーー賄賂なんて偉い人みんなやつてるんじゃないのーーー！」

「『ど』でそんなこと覚えてきたんだか…はあー……確かに政にはそういうこう濁の一面が必要な時もありますが、一国の王女がやれやれとやつていたら民衆が不満を持ちますし、他の貴族などにいい影響を『えません。それにあなたは』の『い』なことは嫌いでしょーーー」

すると少女はちよつと言つて見てだけよと小走りに走り、右手を出して、んつーーーと言つ。

「なんですか?…その手は?」

「返しなさいーーーそれっーーー！」

執事は、間、髪入れずいやですと答え部屋を出でいく。
するとチヨット待ちなさいよーーと、少女が素早く物体をつかんだ。
それから一人は、グギギギつとそれの引っ張り合いで突入することとなつた。

しばらくの間、少女の交渉は決裂したんだからとつづ葉といい

え危険ですからこれは私が預かります、といった執事の言ごい合ごが続いた。

「「はあ…はあ…」」

「はあ…埒があきませんね、こゝはひとつ休戦して話しあわせんか?」

「…はあ、とか言いながら隙を見て奪つてしまりなんでしょうつーつて言いたいけどさすがに疲れたわ…その案飲むことにしまじょ。じやあ、セーのあの机に置くわよ」

と顎で机を指して机に移動するよう促す、トルドもそれにうなずいて従う。

「じゃあ、いくわよ…………セーのつー…つて誰が放すもんですかつー…」

ずいぶん意地汚い少女である。当然のようになにトルドも放していなかつたが。

結局どつちもどつちだった。しかし、少女は、本当に思いつき引つ張つたみたいで執事の白い手袋をするつと宝石が抜ける。

「やつたツー…つてあああーーつ

取つた瞬間、執事だけでなく少女の手からもすつぽ抜けた。

それは、すごい勢いでガシャーンと照明器具にぶち当たる。同時にトルドはあぶない!と、少女を突き飛ばし、破片が落ちてくるであらう場所から少女の安全を確保する。

そして、すさまじい光とキーンとつ音が部屋を覆い尽くした。

しばりへしておさまるとおどおどして口を開く。

「な、なんだつたの？……トルドは大丈夫？」

「はい、大丈夫でござりますが……しかしこれは田くらましの類でしたか……特に外傷はなかったようですね」

そう、と答えながら前を見る。

「んー？……誰か机で呻いているわよ？」

「そうですね？……賊の類には見えませんね……呻いてますし」

田の前の机の上で呻いている黒髪の少年がいた。

「コンコン」と静かに扉をたたく音が聞こえる。

部屋の中にはベッドの上にひつぶせになつて寝ている黒髪の少年がいた。

少年は、寝起きがいいのか、軽くたたいた扉の音に反応し、朝特有的の気怠さを離れるために大きく上に伸びをする。そして、すぐに寝間着を脱ぎ、椅子へと掛け、タンスの中から出した紺色の上下のジャージにいそいそと着替る。

部屋についている洗面台にて眠気を覚ますために冷たい水をバシヤバシヤと顔に叩くかのようにして洗い、壁にかけてある黒いチヨーカーを首につける。

「失礼します。おはようござります……ミチナリ様」

侍女の服装をした少女は、部屋の中に入りミチナリと呼んだ少年のもとに近づき持っていたタオルを渡す。少年に驚いた様子はなく、渡されたタオルを小さくありがとといつて受け取り顔を拭く。

「朝食の準備ができましたので、お座りください」

少女が声をかけると少年はわかつたと席に着き、一ヶ月近く繰り返されている朝の風景だなと思う。そして同時に自分はこんな待遇を受けてもいいのだろうかと思いに耽る。

確かに、自分はこの世界では普通ではないと思うが、朝からメイドさんにお世話されるような人間ではない。自分の世界ではただの男子高校生で特に優れている人間ではなかつた。

そして何の神様のイタズラか運命だかわからないが、異なる世界に一ヶ月前に召喚か事故かでこの世界に現れた。

「もう少しあがつていいよ」

「あつわかりました。ここをかたづけたら上がります」

お疲れ様でしたとバイト先のコンビニを後にする。

このバイト先は高校生である自分を雇ってくれるし、高校生という身分に配慮してちゃんとした時間に帰してくれる。少年”道成”は、とてもこのバイトが気に入っていた。

「給料日は、明日かあ～貯金しどくか」

ほんとに高校生か?という独り言を呟きながらトボトボと家へと夜道を歩く。

ふと違和感を感じて、んと後ろを振り返る。何もない。当然だ。自分はどこにでもいる高校生、そんな特殊な訓練をしたりオカルト的なものを持っているわけではない。

視線を感じるなどストーカーそれでいる人からよく聞く、だがそれもどうもよくわからない、道は、そんなものはいつもと違うほんのちょっととした身のまわりの変化などを視覚で判断し、見られていると思うのではないかと思っている。なのでよく漫画などで見るかける”殺気がした”などは、はから信じないしそんなのないだろと思つていい。そんなのあつたら暗殺とか大変だろなどくだらないことを考えていた。

こきなりキーンとすさまじい音がきこえた。

そして遙を囲むように上から円柱型の光っている檻が現れた。

「なッ！？なんだ？？？」

混乱の極みだった、その檻で//ズが走ったような文字でできているのがからうじて見てとれる。これは何か危険だと感じることはできた。そして檻から抜け出そうと足を動かす。否、動かそうとした。なぜなら足が消えていっている。すでに膝より下は存在しないなかつた。

そしてそれは急速に、早くじゅうとわんばかりに消える速度が早くなつてくる。

「うえつー？ちよつと待

叫びはむなしく響き渡りもせず、直感当たつてたかもと思ひながら最後まで言葉を紡がせず少年の姿は消えていった。

「——つや……//——様ッ

「……うへん

「……//チナリ様ッ！！」

「な、なこつ？—ビ、どうした？！リナ？」

じつと料理を見つめてポケーションとしていた遅は、田の前に座つてゐるメイドの少女により現実に引き戻された。

「食事が進んでいなかつたようなので、声をかけさせていただきました」

そう言つて食事を再開する。食事は、ロールパンをいくつかと何の肉かわからないベーコンを数切れにサラダといった構成になつてゐる。日本人としては米とみそ汁がほしかつたが、これは、しようがないとあきらめた。

「ミチナリ様、本当にそれだけで足りるのでしょうか？」

と食事を中断して心配そうに少女が声をかける。対して遅は、苦笑しながら大丈夫と食べながら答える。

最初はそれはすゞかつた、何がといえば食事が。それはもう、一流なレストランで出そうな高級料理がずらりと並び、シェフ付きで、とてもじやないが落ち着かなかつた。それに朝から食べられるようなものでなく、見ただけで胸焼けしそうだった。

次の日からは、質素なものに変えてくれとお願いし続け今のような朝食になつたのだ。

「それで、なにを考えていたんですか？」

「あー……うん、ちょっといつこに来た時のことを思い出してた」

そうですか、トリナは小さく微笑む。普通に可愛い、というよりこつちに来て思つたのは、あつちに比べて美人やかわいい人が多い気がするなど遅は思つ。正面にいるリナが良い例だ。

肩まで伸びてゐる髪の色は、さすが異世界というか薄い紫色

だつた、そして、くくりくりとした目は、まあ常に半分しか開いてないが、これも同じ色、顔は、欧米人のように厳つい顔もしてない。あつちで言つとアジア系の顔立ちに近い。

改めて考えてみると。

「どうしたんですか？私を見つめて興奮でもしましたか？」のヘンタイ

「じいねーよーこきなり毒吐くのはやめろ…」

「いつもの朝の風景だつた。

「今日の「」予定はびつになつてこぬのですか？」

「いつもと同じ。食べたら遼ちゃんのとこ行つて地獄の特訓、昼は姫と食事、後は先生と雑談」「

パンをちぎりながら淡々と答える。

「ホントに代わり映えのない田舎を過ごしてますね。それで楽しいのですか？」

あきれながらつまらない人ですね、といわれたようだつた。

「なんとでもビール。約束のためとか生きるために楽しいなんて言つてられないの、俺は」

「約束ですか…。あなたも律儀というか、私は悪いのはこちらだと思いますが？」

リナはこの少年が来た時の様子を思い浮かべながら尋ねる。

あの時は本当に大変だと、自分が来た時には、彼はいきなり王族の部屋に侵入し、恐れ多いことにわけわからない言葉で喚き散らしていた。それは、持つて行つた今彼が身に着けている“知恵の話”を付けてからも同じだった。

「ん、まあ、そうだろうけどあれが最善だつたよ。あの時はこっちに来て何もわからない状態だつたし、それにこちらは庶民か賊、あちらは一国の姫様。どちらが権限が強いか、信用されるかで言つたら考えるでもないよ。俺には選択肢なんてなかつたと思う。あの時、外にほっぽり出されるか殺されても文句は言えてもどーしようもなかつた」「確かに、と思う。

彼が言つていることはありえた、というよりあの人ではない人間だつたら殺されていただろう。こちらの文化を何も知らない、言葉がわからない。という点を踏まえても姫様のもとに“来た”ということだけで彼の生存の可能性は極端に上がつた。あれだけの人材を持ち、それを使って彼をこの世界に順応させる。これができたのは姫様だけではないのか、と思案する。

「ですが、姫様の人となりもわかつたと思ひますが、の方はそこまで頑なな方ではありますんよ」

案に少しは気を抜いたらどうですか、と提案する。遅は、ちぎつたパンを食べながら頭を縦に振つてうなづく。

「わかつてゐるよ。毎日とはいかないけど結構な頻度で姫には会つてゐるから、あいつの性格がまつすぐでお人よしつてことはわかつたつ

もり。だけど…いやだからこそこそ約束はしつかりやらないとね

「あなたは眞面目なんですね」

「約束の」とか?それは自分が譲れないと思つてることだからな

首をかしげてリナは、尋ねる。

「譲れないもの…ですか?」

「そつ これは俺の主義だけどね。人は、本当に何でもいいから”これは譲れない”というものもってたほうがいい。何でもいい、例えば、朝は必ず何時に起きるとかでもいいから持つことがいいと思つてゐる」

「本当に何でもいいのですね」

「そうだな。そういうのがないと俺は毎日をだらだらと過ぐすんじやないかな」

遙は、食後の紅茶を飲みながら答える。飲みながら紅茶はうまいなあと思いながらこの世界に紅茶があつてよかつたと思つ。コーヒーが紅茶で言つたら断然紅茶派だ。コーヒーも飲まないことはないけどいろんな香りや味を感じることができるので遙は好きだった。コーヒーを飲むときは集中したいときかタバコを吸うときぐらいなものだった。まだコーヒーは見ていないなかつたらなかつたでいいがあつてほしいなと、思つていた。

「その結果あなたの譲れないものが約束を守るといつ」とですか

「まあ、約束を守るなんて当然だけどな、それにそれだけじゃないし」

「あと、何があるのですか？」

興味深そうに聞いてくる。目をそらさず「じーっと音が出そうなくらい。遅は、目を伏せながら答える。

「内緒。というか、こういうのは人に聞かせるようなもんじやないしな。言いたくない。リナだつて教えたくないものだつてあるだろ？」

「そう……ですね。不躾な質問でした」

そう答えながらいつもの表情に小さく陰りが見えたような気がした。遅は、珍しいなと思いつつ、気が付かないふりをした。

「いや、大げさに言つたけど、ただ話したら恥ずかしいってだけだから。そんな落ち込まないで」

「落ち込んでいません。あなたの頭は大丈夫ですか？」

少しムスつとした顔で何言つてんのこいつはと言つたげだつた。

「俺はその口は大丈夫かと尋ねたい……」

「いやらしー近寄るな！！」

遅は、グサツと胸に来た槍を必死に抜こうと胸を押さえていた。

それからは、いつもどうりに一人で「じちそ」様と手を合わせて朝食を終了した。 したと思ったのだが。

バンッという音とともに部屋に入つてくる侵入者。

ポカーンとしていた遅は、今日は大変な日になりそうだ、と深く深くため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5353s/>

未定

2011年10月9日00時22分発行